

東北連合小学校長会研究協議会青森大会速報

東北連合小学校長会 会長 中谷保美
事務局 青森県小学校長会

第 58 回東北連合小学校長会研究協議会青森大会

第 59 回青森県小学校長会研究大会八戸大会 終わる

第 58 回東北連合小学校長会研究協議会青森大会，第 59 回青森県小学校長会研究大会八戸大会が，7 月 5 日（木）6 日（金）の 2 日間，初めて八戸市を会場に開催された。東北 6 県から 1,000 名を越す校長が参加し，1 日目は，全体会（開会行事，シンポジウム，閉会行事）が行われた。シンポジウムでは，郷土八戸を愛しまちづくりや人づくりにご尽力されたシンポジスト 3 名とコーディネーターをお迎えし，「未来をつくる子どもたちに ～ふるさと ひと まち～」のテーマでお話いただいた。郷土を愛し，自らのアイデアで初めてのことに挑戦し，たくましく自分らしく自分の思いを形にし続けているシンポジスト自身の取組や，私たち校長へ，「チャレンジする権利 失敗する自由を」「困ったときはぜひ地域を頼って，何でも相談できる方をぜひ作ってほしい」等のたくさんのメッセージと励ましの言葉をいただいた。

2 日目は，八戸市街地のホテル 2 会場で 10 分科会の研究発表と協議が行われ，盛会裏に青森大会が終了した。

会長あいさつ

東北連合小学校長会 会長 中谷保美

皆様，今日は。

さて，種差海岸に代表される，豊かな自然と，「日本一の山車絵巻」と呼ばれている八戸三社大祭に代表される，豊かな文化や伝統を有し，水産業や工業を中心に中核市として発展を続ける当地，八戸市に，東北各地から約 1100 名の会員の皆様をお迎えし，第 58 回東北連合小学校長会研究協議会青森大会兼第 59 回青森県小学校長会研究大会八戸大会を開催できますことを，御参会いただきました皆様とともに，喜びたいと思います。

また，本日は，あいにくの天候の中，さらには，御公務極めて御多用の中，青森県副知事・青山祐治様，青森県教育委員会教育長・和嶋延寿様，八戸市副市長・大平透様，全国連合小学校長会長・種村明頼様を始め，多数の御来賓の皆様にご臨席を賜りましたことを，東北連合小学校長会を代表しまして，心より感謝申し上げます。ありがとうございました。加えて，本大会の開催に当たり，日頃より温かい御指導と御支援をいただいております青森県，青森県教育委員会，八戸市，八戸市教育委員会，青森県市町村教育委員会連絡協議会，全国連合小学校長会を始め，関係各位に心より御礼申し上げます。

今年度は，青森県が大会開催県ということで，これまで，八戸市小学校長会を中心に準備を進めて参りました。開催県として，東北各地より御参会いただいた校長先生方に心地よく，また，充実した研修をしていただけるよう精一杯努力して参りますので，御支援・御協力の程よろしくお願ひ申し上げます。

さて，現在，社会は，グローバル化が加速度的に進行し，これまでに経験したことのないスピードで少子高齢化が進むなど，先を見通すことが困難な時代となっております。また，平成 23 年 3 月 11 日には，東日本大震災とそれに伴う原子力発電所事故があり，あれから 7 年と 4 か月が経過しよ



うとしております。被害が甚大であった岩手県、宮城県、福島県を始めとする被災地では、着実に進展はしているものの、完全な復興には、まだまだ多くの労力と時間が必要です。

一方、小学校教育においては、全国的な課題として、子どもの生命尊重や自尊感情、規範意識の低下、いじめ、不登校問題等が挙げられ、これらの改善や解決に向けた対応が求められております。

さらには、昨年3月に告示された新学習指導要領実施に向けた対応、そして、いわゆる教員の働き方改革への対応など、校長としてスピード感をもって取り組まねばならない教育課題が山積しております。これらの課題解決のためには、私達校長は、これまでの実践を振りかえり、その成果と課題を洗い出すとともに、自ら日々研鑽を積み、教職員の資質・能力の向上に努め、目指すべき教育の姿を具体化し、優れたリーダーシップを発揮して、保護者・地域の協力を得ながら、創意に満ち、活力あふれる学校づくりを進める必要があります。

本大会は、こうした状況を踏まえ、平成25年度秋田大会から、大会主題を「新たな知を拓き、人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進」とし、「夢と希望をもち、共に未来を拓く、いのち輝く子どもの育成」を標榜した、昨年度の山形大会の成果を引き継ぎ、副題を「郷土に誇りをもち、未来を主体的に拓くたくましい子どもの育成を目指す学校経営と校長の在り方」として、研究協議を深めることとしております。「人間性豊かな社会を築く日本人の育成」のためには、まずは、子どもたちに、郷土に愛着と誇りをもち、豊かな心を育むとともに、自分自身に対する自信と誇りをもち、共に支え合い、地域社会に貢献しようとする意識を醸成することが大切です。また、グローバル化が急激に進み、日本人が世界各地で活躍する現代社会にあっても、自分の生まれた郷土を理解し、大切にできる心情なくして、真の国際理解は期待できません。私達が教育を行っている小学生の時期こそ、郷土に誇りをもち、絶好の時期ととらえ、その育成に努めることが肝要です。

本大会のプログラムの中には、「地域おこし・人づくり」をテーマにしたシンポジウムが計画されております。意見交換や情報提供をしていただく3名のシンポジストは、地域おこしと人材育成に取り組んでおられ、郷土を愛する子どもの育成をキーワードの1つに掲げている本研究協議会の開催趣旨と軌を一にするもので、今大会に参加している私達校長にとって、自校の学校経営に資する多くの示唆を得ることができるものと確信しております。

最後になりましたが、「東北は一つ」の合い言葉のもと、ここに集った私達校長は、2日間の研修で、普段はなかなか逢うことのできない東北連小の会員同士が、県境を越えて、それぞれの学校経営に触れることのできる、貴重な機会として、互いの実践を持ち寄り、情報交換することで、多くの成果を地元を持ち帰り、それぞれの地区の、あるいは自校の学校経営の充実に役立てていただきますようお願い申し上げます。

シンポジウムの足跡

テーマ 未来をつくる子どもたちに

～ふるさと・ひと・まち～

- 【シンポジスト】 ・北のグルメ都市代表取締役 中居 雅博 氏
・八戸せんべい汁研究所 所長 木村 聡 氏
・特定非営利活動法人はちのへ未来ネット代表理事 平間 恵美 氏

- 【コーディネーター】 デーリー東北新聞社取締役経営企画担当社長室長 風張 知子 氏

【プロフィール】

- ◇中居 雅博 氏 2002年、東北新幹線八戸駅開業の年に誕生した「八戸屋台村・みろく横丁」の仕掛け人。全国初の循環対応型の固定式屋台、一定期間ごとに店舗を入れ替える仕組みなどの斬新なアイデアで成長を続けており、新幹線開業で成功したまちづくりのモデルとして、今も全国から注目を集めている。
- ◇木村 聡 氏 本業では、2008年度から八戸広域観光推進協議会の観光コーディネーターとして「はちのへエリア」（八戸広域8市町村）の広域観光推進を、また2013年度からは八戸観光コンベンション協会の観光コーディネーターも兼務することとなり、地域ならではの体験型等の観光資源を整備して売り込みながら、街なかの賑わいの取り戻しも含めた地域全体の活性化に向けて取り組んでいる。
- ◇平間 恵美 氏 自分の子育てをとおして、母親のつながりを作るための「子育てサークルくれよん」を立ち上げ、親子の居場所づくりを行う。2011年、「八戸ポータルミュージアムはっち」のオープンに伴い、子育て集いの広場「こどもはっち」を八戸市より運営委託。現在、はちのへ未来ネット代表理事として、子育て支援を中心にまちづくりに貢献している。
- ◇風張 知子 氏 プライベートで全国全県の主なるまちを旅行兼視察。その結果、八戸の魅力再認識し誇りに思うとともに、八戸がますます大好きになり、観光課長、「はっち」館長として八戸の魅力発信に努める。現在は、「地域とともに宣言」をしているデーリー東北新聞社の一員として、地域のためにできることを模索中。

《 はじめに 》

八戸市では平成20年度から「願い」「情報」「責任」「学び」の四つを学校、家庭、地域社会が共有し、確かな学びと豊かな育ちに資することを目的として地域密着型教育に取り組んできている。その地域密着型教育が始まる以前より、この八戸地域ではふるさとを愛し、まちづくりや人づくりに尽力された方々がたくさんおられる。今回のシンポジウムでは、その方々の中からフロンティア精神をもち、精力的に活動されている4名の方をシンポジスト及びコーディネーターとしてお招きし、これまでご自身が取り組まれてきたことから導き出される思いや願いを語り合っていたいただいた。

※それぞれの方のお話については、一部省略等しています。

たくましく、自分らしく、思いを形にし続ける3人の取組

＜風張 知子 氏＞

子どもたちがたくましく生きる力を育む、そのための1つの切り口が自分の生まれ育った郷土への誇り。そこから子どもたちが豊かな心を育み、自分に自信をもってほしい。そして、たくましく未来を切り拓いてほしい。シンポジウムのテーマは「未来をつくる子どもたちに～ふるさとひとまち～」。シンポジストの皆さんが、いったい何をやっている方なのか、楽しんでお聞きいただきたい。



<木村 聡 氏>

本業は八戸観光コンベンション協会のスタッフ。平日は観光協会で仕事をし、夜や土曜日・日曜日、休みの日で空いている時間は八戸せんべい汁研究所へ。これは完全なボランティアの団体で、観光協会で給料をもらって、その給料を八戸せんべい汁研究所につぎ込んでいるというような活動をしている。

B-1 グランプリを作ったのがわれわれ八戸せんべい汁研究所。2012年には日本一にもなっている。ぼくらはせんべい汁を売りたいだけ活動しているわけではなく、八戸のことをもっともっと知ってほしい、もっといろいろな人に来てほしい、八戸に住んでいる人たちにもいいまちだと思って暮らし続けてほしい、ということで八戸を発信しようという活動をしてきた。きっかけは2002年の東北新幹線八戸駅開業。当時「八戸」という漢字を読めない人が日本中にたくさんおり、名前を知らないところには来ないというところから、もっと八戸を発信するために何をすればいいんだろう、どのようにして八戸を知ってもらえばいいのだろうと考えた。当時の八戸は、観光資源がいろいろあるが、首都圏でいうと4~5%くらいの知名度しかない。旅先として選ばれる場所ではなかった。



われわれは何を使って八戸をPRしていこうかと考え、せんべい汁をブランドにすることを始めた。ところが市民の反応は非常に冷ややかで、「せんべい汁はふだんの食べ物なのでお客さんがわざわざ食べに来るわけない」「せんべい汁が八戸の名物だって恥ずかしいからPRしないで」という人もいた。スタートした頃はかなり逆風の中でめげずにいろんな活動を展開していった。せんべい汁研究所でルールを2つ作った。1つはせんべい汁に入っているせんべいを作っているせんべい屋さんを入れない、もう1つはせんべい汁を提供している飲食店の人も入れないという会則。ですから、メンバーはふつうの会社員が空いている時間を使って、地域のものを使って、八戸せんべい汁をツールにいろいろな八戸の情報を発信して、地域を元気にしていこうという活動を15年やっている。半分以上は高校生や大学生で、まちおこし活動の体験をしに各地に一緒に出掛けてPRをしている。

八戸に行ってみたいと思ってもらうような仕組みづくりについていろんな調査をして、せんべい汁研究所を作って発信を始めた。要は地域の人たちに「せんべい汁はやはりいいね」、「八戸っていいね」って思ってもらうことであり、全国の人からもせんべい汁があるから八戸に行ってみようと思ってもらうことだった。必ず選ばれる、必ず勝てる地域を作っていこうと活動を始めた。

活動によって地域にどんな変化が起こったかという点、八戸せんべい汁の知名度は2006年には18.2%だったのが、2014年には8割くらいになった。それと同時にいろんな八戸の資源の知名度がどんどん上がってきた。さらに、八戸は

おいしい食材があるところだとみんな理解してくれるようになった。観光客、旅行者も新幹線の開業以降プラスになって300万人台だったものが、今は700万人まで増えてきた。さらに経済効果が総務省調べで年間563億円、八戸せんべい汁の経済効果があるといったことが発表になり、広告宣伝効果だけでも毎年数億円というデータもある。最初はたった12名でスタートしたわれわれ研究所のメンバー。今はちょっと人



数が増えたが、活動をしていく中で、大事なのは来た人たちに楽しんでもらうということ、人の魅力というのがよく分かった。

2016年からは人材育成を大きな事業の柱の1つにした。例えば、小中学校の訪問をして“まちおこし出前講座”，飲食店の人たち対象のアカデミーもやっている。大きいイベントのときは短冊を作って、小学生も含めてみんなにおもてなしのことばを書いてもらい、それを町中のあちこちに飾って、来た人たちが「歓迎してくれている。八戸っていい町だな」と思ってもらえるような活動をしている。学校に行つて八戸の魅力をみんなで考えようねということをやっている。それを受けて子どもたちが自分たちで調べて、地元の魅力をいろんな形でまとめてくれる学校もある。今年も小学校5校、中学校2校で600名くらいを対象にこれから実施する。通算で2000名を超えるという状況。

せんべい汁を中心に観光客が増えたり、物産がいろいろできたり、それによって雇用が生まれたり、また住んでいる人が良い町だなと思つたり、Uターンしたり、Iターンしたり、そんな選ばれ続けるようなまちを目指している。今は、日本だけじゃなくて海外からもたくさん来る、住んでいる人が最後まで「いいまちだ、一生住みたいな」、出ていった子どもたちが「将来帰ってきたいな」と思ってもらえるようなまちを目指して活動している。

<中居 雅博 氏>



みろく横丁も同じく新幹線開業に合わせて、今から16年前に、商工会議所や市役所で12月1日のオープン日が決まり、それに合わせて何かやろうと始まった。継続型事業として提案した屋台村方式を取り上げていただけるならば、できるかどうか調査してみるというのが平成14年の頭だった。中心街をすべて調べ、現在ある木造の家を2つ取り壊して、町内から町内へ通り抜けできる道路を作って、その両側に屋台を張りつけるという考え方で、その交渉から入った。地権者の

方が土地を貸していただけるというので、今の町内から町内へ通り抜けできる横丁ができた。

作る前に七つのコンセプトを発表した。7つのコンセプトを継続し続けるのが八戸屋台村の最大の魅力ということで実施し、今現在も16年ほど継続し続けている。

コンセプトの1つは新幹線八戸駅におけるお客様のおもてなしの目玉として。2つ目は中心商店街の活性化。3つ目は施設そのものを日本で初めての環境対応型にすること。施設をつくるときに、水と光がある所に人は必ず寄ってくるという法則があるので、光は提灯で、水の方はあえて井戸と滝を作った。環境対応型のゼロエミッションのモデルケースとして、屋台村にはごみ箱・ごみ処理は置かないという形を整えた。今も中央に生ごみ処理機、当時としては100万くらいの生ごみ処理機を導入し、店主は仕事が終わったあとその生ごみ処理機に入れて帰るという仕組みになっている。12時間後に肥料として出てくるので、肥料は月24キロぐらい溜めておき、毎月農家に渡している。その肥料で野菜が採れるので、その野菜を全面的に屋台村で使用するという方式。施設そのものをすべてエコロジー商品、建築廃材とエコウッドとリサイクル商品で造っている。これが最大の特徴。4つ目は八戸の情報発信基地。視察のおもてなしをすると共に屋台に入れば八戸の情報を得ることができるような仕組みにした。5つ目は若手企業家を育てること。契約は3年契約で更新はなし。3年に1度改めて再募集をして、約3分の1は新しいやる気のある方々を入れ、3分の2も当然場所がすべて変わる方式を取っている。ですから、3年に1回リニューアルというよりも完全オープンを目指しているという形。その3年の間に一生懸命商売し独立して、八戸市内に屋台村からの卒業生を送り込むというのがこの方式。上げ膳据え膳の単なるチャレンジショップにはしたくないという気持ちもあり、200~300万円くらいのリスクを負うが、オープンの時は北のグルメ都市という有限会社の方で、

一人ずつ全員を銀行に連れて行って保証をつけてお金を借りてあげた。だいたい半年くらいで返し終わるが、どうしてもある程度のリスクは必要という気がしている。6つ目は八戸にとって必要な名物料理、郷土料理を一堂に集めて、2～3軒はしごして八戸の味がわかる方式を取り入れている。7つ目がスローフード時代の幕開けの象徴。私はそもそものスタートがマクドナルドというファストフードの三越の第1号店での店長だった。あえて今、これからやってくるであろうスローフード時代の幕開けの象徴としたいということで、全国にこのみろく横丁を宣伝すると共に、私のコーディネートで全国に24軒の屋台村がある。その方々は全てこのみろく横丁を手本にして作っており、元祖はみろく横丁であると宣伝していただいているので、八戸のみろく横丁に寄っていきたいというお客様が最近また増えているような形になっている。以上、この7つのコンセプトを継続し続けているのが八戸屋台村みろく横丁の最大の特徴になっている。

みろく横丁はお陰様で年間約35万人くらいの方々がおいでになっているが、施設において環境問題と共にいろんな曲線のもつ美しさを非常に考えた。歩道は普通であれば敷地ぎりぎりに屋台を並べて真ん中に大きく作るが、私の横丁の考え方は違っており、肩と肩、袖と袖が若干触れ合うくらいがお客様が行き来するときが一番いいだろうと、狭いところは2.3メートルにした。狭いところから突然広くなって、また狭くなるような曲線のもつ美しさをできる限り表現しようとした。あとで知ったが、大阪の法善寺横丁と同じ幅だった。

<平間 恵美 氏>

八戸市は中学校学区に1つの公民館があり、公民館を中心に社会教育の理念がすごく根付いた地域だと思っている。外から見ると本当にその思いがあり、「自分たちの所にいる子どもたちをみんなで育くもう」という理念がとても根付いた土地だと感じる。

週五日制の導入で、週末どこが子どもたちを受けとろうかとなったとき、八戸では公民館の家庭学級など、地域をすごく中心に考えていた。公民館がプラットホームとなって、まちづくりの方も深く取り組んできた。学校支援連携のボランティアにおいても、教育委員会独自の支援のシステムを作り、いち早く学校にボランティアを送ったのもすごいと思っている。今では古い言葉になったが“学社融合”，学校と地域の連携についてもいち早く取り組み、学校の中に割と早い時期から地域の方が入っていた。公民館を軸としてやってきたまちづくり、それが地域連携、地学連携に深く根付いて、小中学校共にコーディネーターを軸に多くの地域の方が入っている。私はPTAあがりの主婦だが、1人ではできないことでも、子どものために動いている方々と一緒にやれば実現できるということを学んだ。



そこで立ち上げたのが“八戸未来ネットワーク”。団体ではなく、たくさんの方たちと手をつないで、困ったときに助け合おうというネットワークだった。私たちはそのコーディネーターとなった。私たちの目標はネットワークの力で子どもと親の育ちを応援すること、ひいてはそれが子どもと親が希望と安心感をもって幸せに暮らせる地域づくりであると思っている。このことを土台に日々いろんな活動をしている。

三日町、みろく横丁の向いにポータルミュージアムはっちという建物があり、その中の4階に1か所だけ福祉のくくりの子育て支援センターができることになった。私たちもどこか起点をと考え、委託業務に名乗りを上げた。今はその業務を中心に、お父さんとお母さんのおなかの中にいる赤ちゃんのケアから幼稚園、保育園、小学生の居場所作り、中高生のボランティア活動、若者支援ということで不登校や引きこもりの交流会など、いろんな活動をしている。

どのようなことをやっているかということ、そこに集まってくる若いお父さん、お母さんをどう育てていこうかということ、委託事業をいただき、たくさんの方々のサークル活動を行っている。

ほとんどのお母さんたちはお仕事に戻ってしまうので、赤ちゃんが生まれてから12カ月の間に人とつながっていけるように、日々たくさんの事業を抱えている。事業の一つは、おさがり市。赤ちゃんのものはあまり汚れていないので、たくさん集めて無料で提供するというのを年2回やっている。一度に3000~4000点集まり、ものの2時間くらいで配付終了。物を配付するだけでなく、赤ちゃんに対する親の思いを次のお母さんたち・パパたちに受け継ごうと考えて取り組んでいる。



子育て支援センターを中核に若者の健全育成をどう結びつけていったらいいかを考えた。私たちの事業所には職員は6人しかいないが、たくさんの事業を高校生のボランティアの力を借り、週末の放課後、テスト明けなど100人くらいの高校生が単独で登録をしてボランティアで活動を行っている。はっちは週末ともなると到るところに高校生が来る。中心街には予備校が集中しており、JR駅もあるので高校生にとっては町の中が実は一番

安心感があるので、ありとあらゆるところで高校生が勉強している。この高校生が週末の時間が空いている子から順番に私共の施設に入って、お兄さんになったり、読み聞かせをしたり、私たちの代わりに事業を組み立てていたり大変力になっている。

このような活動は、八戸では公民館でも行われていて、地域の中でたくさんのボランティアが動いている。そうやって地域で育った子どもたちは、例えばうちの青年部ですが、だいたい25~26才で、私たちの戦力となって子どもたちのためにいろんな企画をやってくれている。コンサートを開いたり、子どもの町という企画を弘前大学の先生方と連携しながらやったりした。今年は2月に2日間で800人の小学生が集まった。そこにまた高校生が絡んで、お兄さん、お姉さんの指導のもと、この準備に当たってくれている。

ここでびっくりしたのは小学生たちの力。ある程度のシステムを組んであげると自分の意思で自由に動く。これは間違いなく学校教育で養われた力と思う。ただ日常、その養った力を発揮するところがない。こういう企画があるとすごくわかると思う。また自主的な勉強会、市民の会議もやっている。積極的に地域の民生委員を招いて勉強会をすることによって、ママたちに何かあったときには地域にすぐお渡しできるような活動もしている。

今年は国の未来応援基金をいただき、やっと貧困問題に取り組むことができた。青森ではシングル家庭、生活保護がワースト5に入っている。これから東北もその領域では絶対学校が中核となって地域と連携していかなければいけない問題だと思う。子どもたちを長いスパンで見守れるのは地域。学校の皆さんと校長先生方と連携しながら、長いスパンで福祉と教育の垣根を越えて活動団体として頑張っていきたいと思う。

<風張 知子 氏>

各取組は地域だけのものだけではなく、全国的にも高い評価をされている。3人の方のファンもたくさんいて、彼ら彼女らに会いたくて多くの人たちが八戸に来ているというような現状。「ふるさとを誇りに思う」という今日のテーマにふさわしい、八戸の誇りである3人のお話だったと思う。

郷土に誇りをもつということで、八戸ポータルミュージアムはっちについてご紹介したい。これはシビックプライドミュージアム、一言でいえば“八戸の誇り”のミュージアムである。

【「はっち」の紹介は省略】

活動での苦勞，自分をかきたててきたこと

<風張 知子 氏>

それぞれにすばらしい活動をしていることがおわかりいただいたと思う。でも、実はご苦勞があったり、自分をかきたてた何かがあったり、この機会にどうしてもお話ししたいということをお一人ずつお話しいただきたい。

<平間 恵美 氏>



私はふつうの PTA あがりの母親です。ただ思いは子どもと一緒に同じものを見て、同じ時間を共有して一緒に育ちたいと思っていた。初めてのお産、初めての親、早くに母を亡くしていた。出身は仙台、男の子と女の子の 2 人の子は 2 人とも八戸で育った。PTA でもいろんな問題があったが、今思えばそれを支えてくれたのは、その時々先生であったり、公民館の館長さんであったり、PTA のお母さんたちであったり、人に支えられながらこの八戸で子育てをしたことが、今のこの活動につながっている。

小学校を考えると、例えば大きな交通事故以来、雨の日も風の日もいつも一緒に立ってくださった校長先生、児童館の館長をしていたときに困ったときは電話一本でかけつけてくださった校長先生、退職なさった校長先生方が無償で何人かお手伝いしてくださっていること、それは人と人との関わりの中で育てられているありがたさと、私の今の財産と思う。そして、それを見ている私たちの子どもたち、周りで一緒に活動してきた方の子どもたちが青年の活動につながって、また新しい子どもたちにその思いが伝わっていくという活動を八戸でできていることはすごく嬉しい。

ここに来たばかりのときは、公民館のお部屋を 1 つ借りることも大変だった。でも、それを支えてくれたのが、「なんかやりたいと思っているお母さんたちがちょこちょこやっているな、後押ししてあげような」と言ってくださった地域の方々だった。信用して下さって、背中をポンと押して下さったのが公民館の館長さん。自分たちが地域で学んだことは地域に戻しなさいと何度となく教えられたことを覚えている。困ったこと、大変なことを支えてくれているのは人と人とのつながりということを改めて感じ、次の子どもたちにも伝えていきたいと思っている。

<中居 雅博 氏>

私は忙しくて、屋台村にもほとんど行ってない。最低限何をやっているかというところ、月 1 回、自分の時間が 2 時間取れるときに召集をかけて、テナント会と称して、だいたい 74 項目を学習している。最低限必要なこと、同じことの繰り返いを 16 年間毎月 1 回、日にちも時間帯も違うが必ず続けている。それがやはり一番いいという気がしている。要はそれぞれ店主 26 名、いろんな個性と考えの持ち主がいるが、その人たちに学習をさせて最低限必ず守ることを毎月毎月繰り返し繰り返し学習する。これがこのみろく横丁の最大の特徴かと思う。

この施設を造るときに、私は江戸時代の文献から調べた結果、3.3 坪が多すぎても少なすぎてもいけない面積で、コの字型に店主一人を置いて、お客さんが最高 8 人座れる方式をとった。これが現在考えるコミュニケーションを最大限とりやすい方式で、これ以上のものはないというところに注目した。8 人掛けの屋台は見えず知らずのお客さんが一人で入っても、5 分以内に隣や対面のお客さんといろんな話題ですぐ仲良しになれる。ふつうの居酒屋に行っても、見えず知らずの人とすぐお友だちになれるというのはなかなかできないことだが、それを可能にしているのがあの空間という気がしている。江戸時代から育まれてきたコミュニケーションの最大限とりやすい方式を取り入れたのが特徴。

学習をするというのは、先生方にも共通なのかなという気がしているが、最低限守らなければいけないこと、学習しなければいけないことは月1回必ず繰り返し行うことが非常に重要である。これをやっておくと、ものの考え方がわかる。うちの場合は優秀な店主が3年間でできあがる。それでだいたい卒業して自分で店をもつ。屋台の場合は仕入、お客様の応対、交渉、あらゆることを一人でやらなければならない、大きな店を持ったとしてもすべてのことができるので、屋台でだいたい3年すれば立派なお店をもって運営できる。



今卒業生がだいたい17~18名くらいいる。その方たちが屋台村1キロ圏内の空きビル、空き店舗に入って一生懸命商売をしている。また屋台をやりながら、2号店、3号店をもっている方も20人近くいる。この屋台村からどんどん卒業生が出て、お店をもってがんばれば、やがて八戸市内に美味しい店がたくさんできてくる。このことが老後の楽しみである。

これは、最初、銀行から5000万ほどお金を借りて行った究極のボランティア。われわれ役員は一銭も給料をもらわず、店主たちを育て、中心街に送り込むというのが仕事だと思っている。リスクを負った究極のボランティアである。こんなに人気が出ると思っていなかった。今のところ全国に23軒。3年くらい前まではみろく横丁がトップだったが、残念ながら鹿児島と沖縄の国際通りの屋台村には売り上げが負けた。今は第3位。

<木村 聡 氏>

ぼくは八戸の魅力に気がつくのが非常に遅かった。高校の時に八戸に帰ってこないといって家を出た。青年海外協力隊に行つて農業をしようと東京農業大学に入った。そのときに大学を卒業したら2年ずつ海外協力隊員として発展途上国に行つて農業指導をしよう、2年ずつ40歳まで行ける。40歳になったらそれを軍資金にブラジルに渡つて、ブラジルで農業をやって大富豪になるというのが高校のときの夢で、すごくひねくれた子どもだった。もう二度と八戸には帰って来ないからと宣言をして八戸を出て行った。

大学の途中で父親が倒れたりなどあって、やむなく帰つて来なければいけなくなった。八戸なんか何もないのにと思っていたが、ぼくが夏休みに戻ってくるのに合わせて、毎年大学の友だちが八戸に来ていた。ある時「なんでお前たちは毎年来るんだ八戸に」と聞いたら、「八戸いいでしょう。魚は安くておいしいし、お酒を飲んでも安いし、ちょっと車を運転していけばすぐ海水浴場に行けるし、冬もちょっと運転すると安比スキー場まで1時間半。十和田湖も1時間半くらいで行ける。こんないいところないよ」という話をされた。待てよ、実は八戸ってけっこういいんじゃないと思ったのが20歳くらいだった。それから帰つてこなければならなくなり、帰るんだったら住むまちを元気にできるような何かをしたいと思った。本当は仕事でやりたかったが、就職氷河期でなかなかできなかった。

今ぼくらがまちおこし出前講座でやっているのは、子どもたちに対して「八戸って実はいいところいっぱいあるよね。おいしいものがあるよね。魅力的なところいっぱいあるよね。一緒に考えよう」といって、3~4分考える時間を与えて、必ず1人1個ずつ答えを出してもらっている。人数が多いときは2人ペアで。するといろんな意見が出て来る。

われわれの活動は完全ボランティアなので、せんべい汁研究所から何か報酬が出るわけではない。どこか地方に行くと交通費とかは会で負担するが、飲み食いは全部自腹。この活動を続けるポイントは楽しくやるというのが最大のポイント。仕事ではないので、お前これやってよ、あなたこれやってねというふうにはならないので、「やりたい人がやりたいときにできることをやる」というのが基本スタンス。楽しくやっていないうちのメンバーは参加しない。だから常に楽しく、楽しそうにやるというのがぼくらの基本姿勢。

私も本業がある中で、空いている時間を使っているいろんな事務的なことを全部やらなければい

けないので、夜中にやったり、休みをつぶしてやったりと大変だが、“楽しそうにやる”というのがとても大事なポイント。楽しそうにやっていると、私も入りたい、仲間に入れてほしいという人がたくさん出てくる。楽しそうにやっているとそれが大きなうねりになって、人を巻き込んでいくことができると思う。

まちおこし出前講座のときは子どもたちと一緒に考えるが、その前にわれわれの活動を見せよう。でも、まちを元気にするまちおこしの活動は全然難しいことではないんだよという話をする。小学校では、まちを元気にする最初の活動を3つ話している。1つ目は通学路を歩いていて、人とすれ違ったら「おはようございます」「こんにちは」と声をかけること。2つ目は通学路にゴミが落ちていたら拾うこと。ゴミのない道路には次の人はゴミを捨てづらいなのでゴミを捨てなくなる。そうすると歩いている人が気持ちいい、このまちはいいなと思う。3つ目は家にお花を飾っている家がたくさんあるが、少し道路に向けて飾ってもらうこと。そうすると道を歩いている人は花が迎えてくれるので、このまちっていいなと思う。そんなことの1つ1つがまちおこしの始まり。小学生でもできることがたくさんあることを一緒に考えるようすると、子どもたちも「やってみたいな」と思ってくれる。だから、できるだけやってみたいという気持ちをひっぱり出すよう努めている。一旦は八戸を離れても、大学を卒業して少し東京で仕事をしたらまた八戸に帰って暮らしたいという子どもたちを、たくさん育てたいと思って活動している。

伝えたいこと

<風張 知子 氏>

3名の方に共通して、自分のまちや地域への熱い思い、地域への愛、地域の人への愛というものを非常に感じた。最後に、校長先生方に一言ずつ、お伝えしたいことがありましたら、最後のまとめとしてお話をいただきたい。

<木村 聡 氏>



せんべい汁が売れてもぼくらに1円も入ってくる仕組みにはなっていないので、あくまでツールとして、地域に誇りや愛着をもつことを願って、まちおこし出前講座をやっている。一時的には地域を離れることがあっても、将来やっぱりあのまちは良いまちだったから、戻って一生暮らしたいと思ってほしいなと常々思っている。

こういった話を出前講座でも、単発で学校でお話することもよくある。先生たちは木村さんの話、良かったねという話を必ずしてくれる。でも、それで終わっている場合が多い。実はチャレンジする権利は誰にでもある。ぼくらも仕事があるし、年会費4000円を払ってふだんは活動しているので、お金をかけなくてもできることはたくさんある。忙しいとかお金がないとか、全然理由にならない。地域の人たちは子どもたちも含めて、まちのために何かしたいと思っている人はたくさんいて、でも何をすればいいかわからないから動きになっていないと思う。さっき言ったように挨拶をし、ごみ拾いをし、お花を道に向けて飾る、そんなことをちょっとでもいいから始めることが大事だと思う。

先生たちがそんなことを率先してやり始めると、生徒さんたちはその背中を見て、こういうことをすればいいんだというのがわかる。まちのために何かを始めたいと思う人たちが第一歩を踏み出せるのではないかな。やりたいなと思っているだけでは結果にならない。やり始めてはじめて結果が出てくる。ぜひ子どもたちを率先して先生方ができることでいいので楽しそうに

やってみると、子どもたちも一緒に楽しいことをやりたいと言ってくれるのではないかと思う。少しずつでいいのでやり始めてみていただくと、みなさんの地域が少しずつでも元気になっていくのではないかと思う。

「公園の芝生に入っちゃだめ、入って〇〇しちゃだめ。だめ、だめ、だめ。」と言われると人間はやりたくなくなっていくので、逆に「これをやってもいいよ」というやり方にする、まあ常識的にあまり変なことはしないと思う。だめよりは、やってもいいよというような言い方をしてあげることが、たぶん自分たちで考えて、どうすればいいかということにつながっていくような気がする。あまり規制されると、子どもたちはやりたくなくなっちゃう。そんなこともポイントの1つじゃないかと思う。

<中居 雅博 氏>

屋台村に関しては、先ほど言った通り、学習と進化し続けるということ。学習は最低限のこと、要はものの考え方を毎月植えつける。最初の半年くらいは自分の売り上げさえよければ他は関係ないという子が26人集まっていた。最初の半年間は、これを守らなければ即刻出してもらいますという命令だった。やっと私の考え方がわかってきて、後から売上げが自然についてくるというのを実感するのが次の半年。ものの考え方が自分の売り上げじゃなく、八戸のために自分の屋台村がどうあるべきかという考え方に変わるのがだいたい2年過ぎてから。そして3年目で卒業。人間の考え方の計画を立てて、私のほうで教育をしているということ。それがみろく横丁の最大の特徴。

もう1つは常に進化し続けるということ。今がいいからこのままいこうというのは一度も思ったことはない。今がいいので、次はもっといいことがないかというのを必ず模索する。それで新しいイベントをどうして、どのような形で売ったらいいか、イベントをどうしたらできるかを常日頃考える。3年目は店主の方でそれを考えてもらって実行しているというのが3年周期のパターン。その時がこれでいいなと思った時点でだいたい進化が止まる。ですから、常に次を考えることが非常に重要なのかなという気がしている。

<平間 恵美 氏>

木村さんのお話にもあったように、やはり楽しくないとやっていけないということがあって、今でも着ぐるみも着るし、子どもたちと一緒にやっている。八戸に来てもう25年近くなるが、子どもを産んだばかりの子育てのときにどこにも行くところがなくて、サークルを作りたいと思った。赤ちゃんたち、お母さんたちをみる場所がなかなかなくて大変だったが、それが何人かの仲間で1つの形になった。それを形にしていたときに、ちょうど家庭教育が注目されてきていて、初めて行政に子育てサークルをやっているおもしろい人がいるということで、教育委員会とのかかわりができた。

それから何かやりたいと思ったことを1つずつ“形”にしてきた。人間は不思議なもので、思いが1つの形になると次も形にしたいくなる。子どもたちにもやりたいなと思ったことはどんな小さいことでも形にして、その次の形につなげて行って欲しいなと思っている。

3.11の災害のとき、私の住んでいる学区は津波の避難地域で中学校の体育館に1700人も地域の方が逃げ込んだ。学校の先生方は家に帰ることもなく、一晩中外灯をつけ、電気が取れなかったのでPTAのお父さん、お母さんが発電機を回してくれた。お弁当の手配は民生委員のおじいちゃん、おばあちゃんたちが手伝ってくれた。そこに子どもたちが一生懸命掃除をして、まさに学校が“命を守る場所”だということを実感した。

今も学校は地域のまちづくりには絶対欠かせないと思っている。子どもたちが少なくなり高齢者が増える中で、学校が命の灯りだと震災のときには思った。地域のために1つずつ、自分の思いを形にしていくことが地域の子どもたちを守ったり、地域をつくったりすることになると思っている。子どもたちにこの思いを伝えるためには口で言ってもわからないので、自分の行動で示すしかないなと思う。

これからの子育ては絶対に楽ではないと思う。こどもはっちができて7年目、オープンして間もなくスマホが入ってきて、今はもう当たり前のように、私の1歳半の孫も使える。偽物ではだめ。その子どもたちがもう少しして、今度は義務教育に入ってくるときに、どれだけ早いスパンで子育てをする親御さんや子どもたちが変わっていくのだろうと思うと支援する私たち親もどうなっていくのだろうと時々怖くなることもある。

教育、福祉の問題に関しても専門分野では決して乗り越えられない問題がこれからすごく出てくると思う。勿論、家庭も。今から校長先生方にもこれから校長先生になる方たちにも困ったときはぜひ地域を頼り、地域の中に預けられる人、何でも相談できる方をぜひ作ってほしい。そのことが地域で子どもたちを守ること、地域づくりをしていくことにつながるのではと思う。できるだけ私もそれに参加し、自分の思いを形にしたいと思う。

<風張 知子 氏>

地域の人たちをもっと頼ってもいいんじゃない、頼ってよということのメッセージもあったと思う。木村さんのお話にもあって、私も非常に好きな言葉に「チャレンジする権利 失敗する自由」というのがある。経営者となるとなかなかそうはいかないですが、子どもたちにはそのことを伝えていけたらいいのかなと思う。

それぞれすばらしい取組をされていて、先生方もきっとそれぞれにお感じになることがあったと思う。今日は東北の集まりということで東北人は本当に謙虚ですが、謙虚である必要はないと思っている。本当にすばらしい。今、国の方でもインバウンドということで観光の取組をしているが、2002年に外国人2000万人を



目標としていたものが、すでにクリアして今は4000万人を目標にしている。そして、実は東北人の姿に感銘した人が多いといわれている。私たちも記憶に新しい3.11で被災を受けながらも規律を守り配給を待つ東北人の姿に感動し、日本が好きになった外国人がたくさんいる。スポーツ界でも羽生君、大谷君、今をときめくサッカーの柴崎君。そして世界に誇るすばらしい人材が東北から生まれている。八戸でもオリンピック4連覇の偉業を成し遂げた伊調馨さんがいる。東北人のDNAはとてつもなく、東北人であることに自信を持ちたいと思う。

本日のテーマである「ふるさとに誇りをもち、未来を主体的に拓く たくましい子どもの育成」。生き抜いていくためにはまず自分に自信をもつこと。そしてその自信は生まれたまち、縁あって育ったまちに誇りをもちことが基本なのではないかと思う。子どもたちは八戸を巣立っていくが、八戸が拠り所で、ふるさとを誇りに思うことと、何もないまちと思うことでは、どこで暮らしていても、その子たちの人生というものには大きな差があると思う。威張って、「私は八戸に生まれました、東北に生まれました、日本に生まれました。」ということと言える、そんなことを伝えていくことも大事であると思う。自分のまちの「もの」「こと」「ひと」を知る、好きになる、誇りに思う。その自信がエネルギーになって、前向きに生きる力が湧いていくような気がする。まさにこの3名のこういった生き方、チャレンジ精神も地域の誇りとして子どもたちに伝えていきたいと改めて思った。

昨今、子どもたちを取り巻く環境は大変なものがある。先生方は、まずは地域の人たちを頼りながら、ご自身の健康に留意させていただきたいと思う。地域の皆さんに甘えるところは甘え、これから先行き不透明な社会を生きていかなければならない、私たちの宝物である子どもたちのご指導をこれからもどうぞよろしくお願いいたします。

《 参会者からの声から 》

- ・ シンポジウムでは、シンポジストの方々の郷土八戸を愛する思いがひしひしと伝わってきました。その思いを具体的な行動に移して、さらにそれを継続するという点が大変勉強になりました。学校現場とはまた違う立場からのお話でしたが、だからこそ得るものがありました。(岩手県)
- ・ 地域おこしが人づくりにつながることを改めて感じ、元気が出ました。郷土を愛し、誇りに思うことは、子どもたちが自信を持ち、自己肯定感・自己有用感を高めることにつながると思います。この考え方を大事にしていきたいと感じました。(岩手県)
- ・ シンポジウムでは、現在自分の学校と地域で取り組んでいる地域の活性化と学校との関わりという視点で聴くことができ参考になりました。(宮城県)
- ・ シンポジストお一人お一人が、地元への愛を持って、苦勞をいとわず活動なさっていることが伝わってくる全体会でした。もっとお話を聞いていたくなる内容でした。(宮城県)
- ・ シンポジウムのまとめとして、「自分のまちに誇りをもつことと地域の子どもは地域で育てることが大切である」ことが提言された。また「学校は、地域のまちづくりに欠かせず、災害の際は、地域の命を守る所でもある。学校で困ったことがあったら地域を頼ってほしい。」というシンポジストの言葉がとても印象的であった。(秋田県)
- ・ テーマに沿った内容ということもあると思うが、シンポジスト等を地元の方々から人選できた点は、運営上進めやすかったのではと思われる。(秋田県)
- ・ シンポジウムでは、ふるさとを愛し発展を願う皆さんの話をお聞きし、物事を進めていく上での牽引者の姿勢を学ぶことができた。(同様意見多数)(山形県)
- ・ 大変有意義であった。地域振興のために力を尽くしている方々の話を聞いて、少子高齢化が進む中、郷土愛を育てる教育に重点を置いて取り組んでいくことが大切であると改めて感じた。(山形県)
- ・ 地域活性化や地域を愛する子どもたちを育てるヒントをたくさんいただいたシンポジウムであった。一方、「ふるさと、ひと、まち、経済」に関するテーマであったため、校長をコーディネーターにするなど、「人づくりにおける教育の果たす役割」等校長会の研究の視点につながる話になれば、満足感がさらに高まったと思われる。(福島県)
- ・ シンポジウムでは、それぞれの立場で「ふるさと・ひと・まち」づくりに熱意をもって取り組んでいることに感銘を受けました。改めて、子どもたちは地域の宝であること、地域と関わり地域を大切に思う子どもたちを育てていくこと、地域や関係団体と連携したしかけや取組を行うことなど実感しました。(青森県)

分科会

10 分科会が八戸市街地の 2 つのホテルで行われた。分科会では、視点 1・2 の研究発表があり、その後、少人数グループによる研究協議の柱に沿った協議が活発に行われた。

分科会			研究課題	リーダーシップの視点
学 校 経 営	1	経営、組 織・運営	目指す学校づくりと 組織・運営の活性化	①学校の課題を明確にした学校経営の推進
				②教職員の参画意識を高揚する活力ある組織・運営
学 校 経 営	2	評価・改 善	教育活動の活性化を 図る学校評価と学校 運営の改善	①教育の質の向上を目指した学校評価・運営の構築
				②学校の活力を高める学校評価・教職員評価
教 育 課 程	3	知性・ 創造性	知性・創造性を育む教 育課程	①知性・創造性を育む教育課程の編成
				②知性・創造性を育む教育課程の編成・実施・評価・改善
	4	豊かな人 間性	豊かな人間関係を育 む教育課程	①他と共に、よりよく生きるための人権感覚の育成
②豊かな心を育成する教育課程の編成・実施・評価・改善				
教 育 課 程	5	健やかな 体	未来に夢を描き生き る力を育てる健康教 育・環境教育	①心身の健やかな成長を目指す教育課程の編成・実施・評価・改善（健康教育）
				②体験を通して実践的な態度を育む教育課程の編成・実施・評価・改善（環境教育）
指 導 ・ 育 成	6	研究・研 修	学校の教育力を高め る研究・研修	①実践的な指導力を高める校内研修体制の推進
				②将来への夢や展望，参画意識をもたせる研修の推進と職員の育成
危 機 管 理	7	学校安全	安全・安心な学ぶ環境 づくり	①自ら判断し行動できる子どもを育てる安全教育の推進
				②地域等との連携・協力を図った意図的・計画的な取組の推進
危 機 管 理	8	危機対応	防災教育や自然災害 への対応	①自然災害の特性を理解し，自ら判断し行動できる防災教育の推進
				②学校単独の取組や他校種，地域との連携した防災対応の推進
教 育 課 題	9	自立と社 会性	自立と社会参加を図 る教育の推進	①自立と社会参加を図る特別支援教育の推進
				②未来への夢や志を育むキャリア教育の推進
教 育 課 題	10	連携・接 続	家庭・地域・異校種等 との連携・接続の推進	①家庭・地域と連携し，地域に貢献する学校づくりの推進
				② 幼保・小・中等との円滑な接続のための組織的な取組の推進

大会スナップ

《全体会の様子》



《分科会の様子》

【第1分科会】



【第2分科会】



【第3分科会】



【第4分科会】



【第5分科会】



【第6分科会】



【第7分科会】



【第8分科会】



【第9分科会】



【第10分科会】

